

「在朝日本人医師」を概念的に解体する（要旨）

——集団伝記学的な基礎分析——

Hoi-Eun Kim（金會恩）

本報告では、1926年版の『日本医籍録』を基本資料として、植民地朝鮮で活動した日本人医師約600人についての集団伝記学（prosopography）的な基礎特徴を考察する。『日本医籍録』は1919年から1941年の間に出版された五種類の他の医師一覧と異なり、具体的な個人情報が含まれているという利点があるが、1925年の初版発行後わずか二回（1926年、1930年）しか更新されなかったという欠点がある。報告では、医師の平均年齢、出身大学、出身地域、専門分野、朝鮮での地理的分布などを分析し、「日本」の植民地医学の特性に関連する三つの注目すべき点を提示した。

第一は、1920年代に朝鮮で活躍した医師においては、九州出身の医師が圧倒的に多かったという事実に起因するもので、これまでの東京中心主義的な視点から抜け出し在朝日本人医師養成の実質的なインキュベーターであった1900年代・1910年代の長崎医学専門学校、熊本医学専門学校、九州帝国大学医学部における医学教育、知的・人的ネットワークの形成に注目する必要があるという点である。第二は、日本人医師の高い転出率、および植民地の周辺地から大都市への移動という現象が朝鮮の医療需給状況にどのような影響を与えたのかという問題で、当時の日本内地との違いにも注目する必要があると問題提起した。第三は、在朝日本人医師たちが朝鮮から戻った後の軌跡を追跡することで、日本医学と植民地医学の二分法を克服する必要があるという点である。

（原文：英語）